

山に歌ふ

著者	坂本, 浩
雑誌名	龍南
巻	2 0 8
ページ	5 2 - 5 3
発行年	1928-12-10
その他の言語のタイトル	山に歌う
URL	http://hdl.handle.net/2298/9042

山に歌ふ

山を愛するT兄に……………

坂 本 浩

初めての登山の日なりこのねぬるあさけの風の頬にすゞしも
山腹の朝まだ早し路のべのりんだうの花はつぼみたるかな
瀧つ瀬の岩にかゝれるもみち葉の雨ふる今日はいろ冴えてみゆ
散りつもれる落葉かきわけ岩の間に湧けるま清水をわがくみにけり
山路おほふ落葉枯葉をふみゆけば谿川の音ひゞきくるかも
なづかしき久住の峯に近づけり追分の文字のいとどうれしも
これぞこれ久住の山の嶺か大阿蘇の五嶽も眼下にし見ゆ
秋空に人聲のすと見上ぐれば山はらみちに人影のみゆ

なづかしき人に別るる思ひもて久住の峯に別れ告ぐるも
枯萱の岡を越ゆれば下りなり山の出湯の法華院の見ゆ
山々に四方かこまるる谿間なれば法華院の夜は早やくれにけり
さゝやかなる出湯なりけりほのくらき洋燈一つあはくてらしつゝ
耳なれぬ谿川の音にねもやらず山の一夜をわがあかしけり
法華院の古き火鉢とすゝけたる洋燈の灯は忘れかねつも
硫黄山の白き焰の山の間に隠るまではふりかへりみつ
杉並木の間ゆ白き湯氣の見ゆ白瀧の湯は近づきぬらし
窓ぎわの松の梢に風ふきて筋湯の夜はあけはなれけり